

# 大田広域市での日々

榎 陽斗

私がこの姉妹都市交流事業に応募した主な理由は大田広域市の観光客に対する対応を現地で体験しこれからの札幌市の観光業の発展につなげたいと思ったからです。（このことについては最後にふれます）この旅行記では主に2日目、3日目の内容と感じたことや観光に対する日韓の違いを書いていこうと思います。

## 二日目

二日目は大田広域市の国際科学博物館、大田地質博物館、韓国航空宇宙研究院に行きました。国際科学博物館では電気やレーザーについて係の方が説明してくれました。しかし説明は韓国語。私たちが困っている時、ガン君とハンギョル君が説明を翻訳してくれました。また実験に参加できる機会も作ってくれました。自由時間では、VR体験をしたり、拡張現実（AR）の技術を見たりしました。この国際科学博物館で過ごした時間で4人の距離がとても近づきました。地質博物館では化石などを見るだけでなく、2人から韓国語の読み方、発音の仕方をその場のハングルを使って教えてもらいました。そして、予定にはなかった足湯に行くことになりました。気温が高い中でしたが地元の人で賑わっていました。なぜなら、その足湯は無料の公共施設でタオルが無くても、風を出す機械があり足を乾かすことができるのです。私はこの公共施設は観光客にも地元の住民にも愛されるものだと思います。韓国航空宇宙研究院（KARI）では指定場所以外での写真



撮影、スマホの使用すらできないという注意を韓国語、日本語、ロシア語で言われました。

私はそのくらい貴重な場所で航空、宇宙の最新技術を学びました。そしてこの日の予定は終了しタクシーで家に帰りました。

韓国は日本よりタクシー代が安く驚きました。その後、夜ご飯のサムギョプサルを食べて映画を見ました。映画を見ている途中、ガン君がデリバリーでチキンを注文していました。これはデリバリーで夜食を食べるという韓国の文化で、日本ではデリバリーではピザくらいでありしないと伝えると、とても驚いていました。そしてデリバリーが届くとアルミホイルに包まれた、フライドチキンとヤンニョムチキンが!!思っていたよりもヤンニョムチキンが辛くてやっぱり韓国の料理は辛い物が多いなと感じました。チキンを食べながら映画をみていると二日目が終わっていました。



### 三日目

三日目はバスで若者の街ウンヘン洞へ行きました。到着するとそこはたくさんの若者で賑わっていました。また、街中にはカラオケとネットカフェ、ゲームセンターがたくさんありました。私達はゲームセンターに行きました。そこには日本のゲームもありました。日本にはない、BB 弾銃の射撃ゲームもあり、つい熱中してしまいました。またクレーンゲームがワンプレイ₩500 で日本円だと約 50 円で二分の一の値段で遊ぶことができます。次に、コンビニに行きチルソンサイダーを買いました。コンビニなのにビニール袋はつ



いてなく、韓国は日本よりも環境保全運動に取り組んでいるのかと思い、調べてくと 2019 年から使い捨てレジ袋の配布が禁止されているそうです。(左の写真はスーパーでの袋の代わりに段ボールが置かれている様子) このあと、朝風君ハンギョル君達と合流してみんなでボーリング場に行き、そのあと両方のホストファミリーと一緒にジャージャー麺を食べに行きました。食べ終えたあとみんなでハンギョル君の家に行き、4人で色々なゲームをしたり夜食を食べたりしてさらに仲良くなりました。あっという間に時間が経ち帰ることに、朝風君もハンギョル君も最後まで見送ってくれました!!そして、家に帰ると思いきや、かき氷を食べることに!!夜の 11 時半なのに店内には 2~3 組のお客さんがいてびっくりしました。本当に韓国の夜は長いなと思いました。眠かった私はかき氷の冷たさで目覚めました。かき氷を食べているとガン君が頭を抱えていました。かき氷を食べて頭がキーンとするのは世界共通なのだと思います(笑)そして残り少しになると、じゃんけんをして食べる人を決めることになりました。私は個人的に韓国式のじゃんけんが好きなのでやる気満々で挑むと、負けてしまい冷たいのを我慢してたくさん食べました。でも、ふわふわで美味しかったので負けて良かったのかなと思ったりもしました(笑)

### まとめ

今回の研修は日韓関係悪化の問題がありましたが、現地では温かく私達を迎え入れてくれました。貴重な韓国文化を体験でき、とても将来に役立つ研修でした。また、韓国の観光客に対する対応は公共交通機関では日本の方が優れていましたが、ホテルや店先では韓国の方が優れていました。私はよく「日本人ですか?」と韓国語や日本語で聞かれ、「はい」と答えると「私は日本語少しできますよ」と言って対応してくれました。これから札幌への観光客を増やすために、第三言語を学習する場を設ける事が大切な事だと思います。第三言語を話せる人の増加により今まで以上に札幌の良さを知ってもらいたいと思います。

